
いつか絶対...

clover

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか絶対…

【Nコード】

N3894V

【作者名】

clover

【あらすじ】

工藤新一に帰って1カ月。やっと取り戻した平穏な生活が突如崩れていく。突然警視庁に届いた一通の手紙。差出人もなく、いぶかしむ捜査一課の面々。新しく配属された刑事。そこへ起こった連続殺人事件。「いったい何の目的で…」「手掛かりがまったく…」

やっと導き出された人物は…「重要参考人として工藤新一を指名手配しろ」「いったいどうして」

「探偵坊主はそんなことしない」「新一は私が守るから」「いつか絶対お前のもとに帰ってくるから、それまで待

「つててくれ」新一の思いと蘭の決意が交差するとき事件は終焉へと導かれる！

ブローグ

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ
カタ.....

そこはどこかの薬品庫のようだった。

棚には無数の薬品が並んでいる。

だが、ラベルの文字が見えないほど、部屋の中は真っ暗だった。

暗闇の中、1人の男がパソコンに文字を打っていた。

男の手元には一枚の写真。

そして、一枚の手紙が

それにはこう書かれていた -

「
ク
ド
ウ
シ
ン
イ
チ
オ
マ
エ
ヲ
ケ
シ
テ
ヤ
ル
」

はじまり

「ハアア

」

「どうしたの高木君？ため息なんかついて」

警視庁捜査一課の机の上で高木は盛大なため息をついていた。

そこへ上司兼恋人の佐藤美和子がやってきた。

「あつ、いや。今日も工藤君に助けられちゃったな　　と　　思　　っ　　て　　…」

高木は今日の事件の報告書を見ながら言った。

そこには妻の愛人を殺した夫の事件が書かれていた。

佐藤はそれを横からのぞくと苦笑した。

「工藤君戻ってきてから、毎日のように事件を解決してるみたいね。

」

しばらく姿を見せないと思ってたら、ついこの間偶然居合わせた事

件を華麗に解決した。

そして、それから毎日のように事件に呼ばれるようになった。

まあ、呼んでるのは自分たちの上司の目暮なのだが…

「今まで表にあんまり出てなかったみたいですけど、どこ行ってたんでしょうね」

高木はそう言いながら、ついさっき新一に言われたことを思い出していた。

『大事な人には言えるときに言いたいことを言うのが一番ですよ。いつ言えなくなるかわかりませんから。』

少し意味ありげな新一の言葉に高木は思いっきり動揺してしまった。

（どうしてばれたんだろう…。工藤君に言った覚えはないのに…）

愚問ともいえる疑問に高木は少々落ち込み気味だった。

（プロポーズ……か）

「高木君？」

佐藤と目が合つてとつさに固まってしまった高木に佐藤は笑つた。

「捜査一課に手紙が届いてますよ」

「はい」

入り口で呼ばれて佐藤がそつちへ向かった。

そして、それが事件の始まりだった。

平和な日々

「新一、起きてる?。」

「…ああ、なんとか」

教室で今にも目が閉じそうな新一に蘭は声をかけた。

「ちょっと、少しはしゃきっとしなさいよ。まだ二時間目よ」

自習中で先生がいないのをいいことに周りは騒いでいた。

「しょうがないだろ、昨日夜遅くまで勉強してたんだから」

組織がらみの事件でしばらく休んでいた新一にはそれを埋めるための膨大な課題があてられていた。

新一の頭なら解けないことはないのだが、いかんせん量が多い。

昼間、事件に出ていることの多い新一には夜やるしかないのだ。

「事件事件っていつもそればっかで学生の本分をおろそかにするからでしょ!!!今に留年するわよ!!!」

「はいはい、朝からお熱いこと」

そこへ園子が二人のもとへやってきた。

「ちょっと、園子!!」

園子はニヤニヤしながら二人を見ていた。

「いいじゃない、二人とももうれっきとしたカップルなんだし」

新一が戻ってきた1カ月前、新一は蘭に告白した。

それから二人は公認のカップルなのだ。

「ちょっと、新一!!寝ない!!」

平和な日々はもう崩れ始めていた。

新しい刑事

「今日から捜査一課に配属されることになった山辺拓未君だ。」

目暮がそついうと隣に立っていた人物は頭を下げた。

「山辺です。よろしくお願いします。」

（なんかやけに頭硬そうな刑事がきたわね。）

（佐藤さん、頭硬そうって…）

「山辺君は……高木君！いろいろ教えてやってくれ」

こそこそ話していた佐藤と高木はびくつとしながら、目暮の顔を見た。

「はっ、はい！」

集まっていた刑事がそれぞれの仕事に戻ると、そこには佐藤、高木、

山辺だけが残った。

「高木です。よろしく。」

「佐藤です。これからよろしくね。」

二人が簡単に自己紹介すると、山辺はまた頭を下げた。

「よろしくお願いします。」

山辺が顔をあげ、高木が口を開こうとした時、山辺がそれをさえぎった。

「それで、例の手紙はどこですか？」

「「えっ」」

その言葉に二人は顔を見合わせた。

「昨日、ここの捜査一課に届いた手紙を見せてください。」

高木は最初から見せるつもりで持っていたそれを山辺に渡した。

第一の殺人

「殺人事件だ！すぐに現場に向かってくれ！！」

目暮がそう叫ぶと一課の人間はすぐに支度をして出て行った。

「高木君いくわよ！！山辺刑事も！」

「はい！」

山辺は高木に続いて無言でついていった。

手には先ほどまで見ていた一通の手紙を持って
。

「おい、誰だ？携帯なってるの」

教室の中に鳴り響いた着信音に教師が声をあげた。

「工藤じゃないのか？」

みんながいつせいに机に伏せている新一を見た。

携帯はいまだに鳴り響いている。

「ちょっと、新一！携帯なってるわよ。」

「
んっ？」

蘭が新一の体をゆすると起き上がり携帯をとった。

「はい。わかりました。」

初対面

「工藤君。悪いね、いつもいつも。」

「いいえ。」

新一たちの通っている高校の近くの民家で男性が遺体で発見された。

死因は心臓を拳銃で一発。即死だった。

「目暮警部、凶器の拳銃のらっきょうが発見されました。」

高木がビニール袋を持ってくると、その後ろから山辺がついてきた。

新一と目が合うと山辺は不審そうな顔をした。

「おお、紹介するよ。今度一課に配属された山辺刑事だ。山辺君、高校生探偵の工藤新一君だ。」

「よろしくお願いします。山辺刑事」

新一がそう言って手を出すと、山辺は無言でその手をとった。

「」迷惑はおかけしませんので……」

「協力してもらってるのは我々なんだ。迷惑なんて」

目暮がそう言おうとすると、山辺は新一の手首を持ち直し、そのまま自分のほうに引っ張った。

「えつつ、」

新一は踏ん張ることができず、そのまま思いつきり倒れそうになったのを山辺に支えられた。

「くつ、工藤君？」

一瞬、力が抜けたように体を支えられなくなった新一に目暮は困惑した声をかけた。

新一は少し荒くなった息を隠すように山辺から離れ、笑顔を作った。

「すみません。ちょっと油断していただけです。」

目暮や高木に向けて、そう言つと山辺は新一の後を通りながら他の人には聞こえないような声で言葉を口にした。

新一が驚いてそちらを見ると、山辺は振り返らずにそのまま部屋を出て行った。

『38.4。動悸と軽い呼吸困難。さっさと帰れ。』

副作用

ATPX4869の解毒剤の副作用として食欲がなくなる、眠れなくなるなどの症状が出ると薬を作った灰原に言われていた。

どれも軽いもので1週間くらい経てば収まるものだ。

しかし、体が幼児化してから新一は何回も試作品の解毒剤を使って元の体に戻っては、また幼児化をくりかえしていた。

それは、新一の体にとって確実に負担になっていた。

灰原がデータを元に作った解毒剤で完璧に元に戻ったのはいいものの、新一の体の免疫力は低下していたのだ。

だから、軽いはずだった副作用は今の新一の体では多大な負担になっている。

しかも、それはなぜか収まることを知らず今も新一の体を追いこんでいた。

しかし元々、ポーカーフェイスが得意な新一は、警察関係者や身近な人はもちろん。蘭までにもそれを隠し通せるようになっていた。

頭のいい新一は、それを隠せるように自分なりにいろいろ調べてやり過ごしていたのだ。

もちろん灰原にもこれは知らせていない。

灰原は確実に自分を責めると思い、隠し通すことを決めていた。

（山辺刑事……か）

今のところだれも破れなかった自分の体調を初対面で、一瞬で見破った刑事に新一は少し違和感を持った。

手紙

「何かあったんですか？」

あれから3日、結局犯人の手掛かりがつかめないまま時間だけが過ぎていた。

警視庁に来ていた新一はずっと思っていたことを佐藤刑事に聞いた。

「何かって？」

新一の顔を見て、一瞬、眉を動かした佐藤は何もないように問いつ返した。

「ココで何かあったんですよね？高木刑事も佐藤刑事も、みなさんずっと様子がおかしいですから……」

佐藤は新一の顔をじっと見つめると、あきらめたように苦笑した。

「やっぱり、工藤君にはかなわないわね。いいわ。こっちに来て」

佐藤はちょうど目のあった高木に合図すると、3人は奥の個室へと移った。

高木の手には、1枚の紙切れがあった。

それを受け取ると、新一は声に出して読んだ。

『我が求めるのはただ1人。そいつを殺すのみだ。それまでの犠牲はいとわない。お前らが邪魔をするのならこの東京の人間すべてが人質だ。』

新一はそれを読むと黙って考え込んだ。

「もしかしたら、この事件と関係あるんじゃないかっていま警視庁内が騒ぎになってるんだ。」

「…だとすると、もしかして連続殺人になるんじゃない」

「

「…そうね。そうなるわね。」

新一はそれを見ながら考えていた。

（この「ただ1人」っていったい誰のことなんだ？…）

連続殺人

「……予想通りになってしまったわね」

第一の殺人から4日後、ついに第二の殺人が起きてしまった。

死因は同じ拳銃で心臓を1発。即死だ。

新一は目暮に呼ばれて、またもや警視庁にいた。

捜査会議に参加させてもらっていたのだ。そしてそこには小五郎の姿もあった。

「どうしてお前までいるんだか…」

小五郎は新一を見るなり、そういつて顔をしかめた。

コナンがいなくなっってから結局仕事は途絶えず、いまでは新一と同じく、目暮に呼ばれる日々である。

（俺のおかげでもあるんだけどな…）

新一は顔は作り笑いを浮かべながら、内心毒づいていた。

今は休憩中でみな思い思いに喉をうるおしたり、談笑していた。

新一も誰にも気づかれぬようにいつも飲んでる薬をこっそり飲みながら、休憩をとっていた。

まもなく会議が始まる時間になると、皆会議室に戻って行った。

異変

会議が始まって、少しすると新一は異変に気付いた。

(……あれ?……なんか、頭がぼ　　っとする……?……)

いつもどこかしら体の異常は感じていたが、こんなのは初めてだった。

ましてや、こんな昼間に、しかもさっき薬を飲んだばかりだ。

新一は自分である程度調べてそれなりの対処薬を作っていた。

灰原に頼めない以上、自分でなんとかするしかない。

幸い黒の組織を壊滅まで追い込んだ新一には普通の人より数倍も切れる頭があった。

そして、それなりのコネも。

そうして作り上げた薬を毎日飲み、今のところ自分の症状を他人に

隠し通している。

(……量を間違えた……？……いや、そんなはずは………)

「……君？…藤君。………工藤君！」

「……えっ？」

新一があれこれ考えを巡らせていると、いつの間にか刑事たちがみんな新一のほうに注目していた。

「どうかしたのかね？君の意見も聞かせてもらいたいんだが」

目暮がそういうと新一は視界の端に山辺がじっと睨んでいるのを確認しながら、事件について話し始めた。

体の異常はどんどん強くなっていくばかりだった。

悪化

会議があともう少しで終わるといふ頃、新一の体調は限界にもう限界に達していた。

自分の体から発せられる高い温度、激しい頭痛、動悸、荒い息。

まだ周りの刑事は気付いてないみたいだが、さすがにもう隠し通すのは難しくなってきた。

気付かれるのも時間の問題だろう。

（早く終わってくれ

っっ）

苦しみを隠しながら山辺のほうを見てみると、案の定こちらをじっと見ていた。

「それでは、それぞれ捜査に向かってくれ!!」

目暮のその声と同時に刑事たちはそれぞれ動き出した。

新一はほっとしながらも少しでも体をなだめるために大きく息を吸った。

「大丈夫かい？工藤君」

高木刑事が少し心配そうに声をかけてきたが、新一は作り笑いで返すしかなかった。

やっと体調も少しだけ落ち着いたところで新一は席を立った。

「あつ、工藤君」

目暮に声をかけられ、振り向くと白鳥と一緒にこちらに歩いてきた。

「君がさっき言っていたことなんだが……………」

「すみません、警部。ちょっと野暮用があるんで後にしてもらえませんか？」

長話になりそうだったと思った新一は、一旦話を切った。

このままだといつまた体調が悪化するかわからない。だから早くここから離れたほうがいい。

そう思い新一は会議室を後にした。若干警部たちに不審がられたが…

(ふう っ)

新一はトイレの壁に寄りかかった。

(危なかったな…)

あのままあそこにいたら確実にばれていただろう。

（とにかく、薬を　　）

新一は持っていた薬をさっき買ってきたミネラルウォーターでのみ、症状が落ち着くのを待つ。

やっと落ち着いたところで廊下へ出るとちょうど高木刑事と佐藤刑事に会った。

「あつ、工藤君」

佐藤刑事は新一を見付けると気さくな笑顔でこちらに向かってくる。

「佐藤刑事、高木刑事」

新一も笑顔を返す。

「工藤君、用はもういいのかい？」

「ええ、まあ」

「じゃあ、さっきの話の続き聞かせてもらえないかしら？」

新一はうなずくと歩き出した2人のあとについていった。

しかし、その時

っ

「ゴホっ、ゲホ、ゲホっっ、ゴホゴホっ」

「…工藤君？」

「ゲホゲホっ…………ゴホっ…ゴホっ」

「ちょっと大丈夫？」

新一が突然せき込みだしたのを聞いて、2人は振り向いて声をかけた。

新一は手で口を覆ってなんとか咳を抑えようとしたが、いつころにおさまらない。

「…………ゲホっ、…………ゲホっっ……………」

だんだんと息が苦しくなってくることに焦りながらも二人の刑事に言葉を発しようとしたが、うまくいかない。

「大丈夫かい？工藤君」

新一は壁に手をついてせき込んでいたが、やがてそのまま膝を床につけた。

（なんで

っ）

さっきおさまったと思っていた症状がまた帰ってくる。

体の異常な熱さ、そして動悸、荒い息、ひどいめまい……そして、咳がおさまったとおもったら手の痙攣が始まった。

そのまま平衡感覚を失い、新一は床に倒れこんだ。痙攣が起こっている左手を右手で押さえていたが、一向におさまる気配がない。

「工藤君！！」

高木も佐藤も必死で呼びかけるが意識がもつろつとしているのか返事はない。

「どうかしたのかね？」

ちょうどその時廊下を歩いてきた目暮、白鳥、小五郎が二人の姿を見つけて声をかけると一同は目を見開いた。

「おい、どうしたんだ！？」

「わかりません！突然苦しみだして　　っ」

新一の様子に一同は驚きながら駆け寄った。

「早く救急車を！！」

「それでは間に合いません」

いきなり聞こえた声の先には、山辺がたっていた。

山辺は、新一に近づき、額に手を当て、それから脈をとった。

そして、なにやら紙に文字を書き、それを近くにいた高木に渡した。

「これを用意してください。鑑識に行けばあるはずです。」

そこにはなにやら薬品名が書かれていた。

毒

「持ってきました。」

高木は不審に思いながらも言つとおりの物を急いで持ってきた。

山辺はそれを受け取るとそれを注射器に入れ、壁に寄りかからせ、浅い息を繰り返している新一の腕に打った。

周りの刑事は、それをただ呆然と見ていた。

やがて新一の状態が少し落ち着き、先ほどのような苦しそうな息遣いが穏やかなものになっていった。

もう一度脈を確認すると、山辺は立ち上がり、近くにいた高木と佐藤に声をかけた。

「これで一応は大丈夫です。ただ、これは応急処置なのですぐに病

院につれてったほうがいいでしょう。」

「えっ ええ。 高木君、千葉君車回して！」

佐藤は後ろにいた千葉にそういつと山辺に向き直った。

「あなたいつたい……」

「医師免許を持っています。彼の状態が一刻を争うものだったので処置しました。」

山辺はそういつと新一のほうを見た。さっきよりは落ち着いたものの新一の顔色は悪く、意識はない。

「彼は何かの毒物を盛られた可能性があります。」

「毒!？」

その場にいた一同は驚きを隠せずにいた。この警視庁内でいったいだれが……

「ただそれは引き金に過ぎないかもしれません。彼は元から体調がすぐれなかったようですし……」

その時、ちょうど佐藤の携帯に千葉から車の準備ができたとの連絡が入り、山辺、佐藤、高木が病院に付き添った。

病院

（あれ……？……）

新一が目を覚ますと真っ白い天井が見えた。

（……そっか、確か警視庁で倒れて……）

新一が体を起こそうとすると一気に気持ち悪さがこみ上げて思わず口を手で覆った。

「大丈夫かい！？工藤君」

いつの間にか病室にいた高木刑事が心配そうに新一の顔を覗き込んだ。

「…高木刑事、いつからいました？……」

新一がそっというと高木は苦笑した。

「ずっとここにいたけど…、気付かなかったかい？」

「……ええ」

高木が若干ショックを受けたような顔をしたが、すぐに真剣な顔に戻った。

「…会議に出されていた工藤君のお茶だけに毒物が入っていた。君を守れなくてホントに申し訳ない。」

高木はそついうと頭を下げた。

それを見ながら今度は新一が苦笑した。

「僕も自分がいつ危険な目に会つか分からない立場にいることは分かっているつもりです。今回は僕が油断していたのがいけないんです。」

新一がそついうとそこへドアをノックする音が聞こえた。

「目が覚めたようだね、工藤君。」

ドアからは目暮、佐藤、千葉が入ってきた。

秘密

「君の飲んでいたお茶から毒物が検出された。一応、今のところ容疑者を洗っているところだ。」

目暮がそう言うと、千葉が資料を見ながらそれに続いた。

「容疑者として、お茶を入れた警官や監視カメラから工藤君に近づいた人間を調べていますが…」

「犯人は、もう警視庁にはいませんよ。」

千葉の言葉を新一はさえぎった。

「調べても何も出ませんよ。」

「どういうことだい？工藤君」

新一の確信めいた言葉にその場にいた一同は困惑した。

「どうしてそんなことがいえるんだ？」

小五郎がそう聞くと新一は苦笑いで返した。

「犯人は誰かに変装して僕に毒を盛ったんです。僕が毒物を摂取したと確認したらすぐに警視庁内を証拠も残さずに本物と入れ替わったいるでしょう。」

「どうしてそう言いきれるんだい？」

「……警視庁内に入るくらいなんですから、よほど捕まらない自信がないとそんなことしませんよ。」

新一がそう言うと目暮たちは考えた後に納得した。ただ1人をのぞいては……

（まだ残党が残っていたとはな……………）

新一はベットの上で眉をひそめた。

そう。今回新一に毒を持ったのは黒の組織の残党。新一はそう確信していた。

こんなやり方ができるのはあいつらのみ。しかも組織壊滅に多大な貢献をFBIにした新一に恨みを持つのは当然だ。幸いFBIは日本警察に本当のことを話してないので、目暮たちが知るわけがない。しかし、いまだに残党がいて新一を狙っているとなると蘭たち周りの人間に危害が及ぶことも考えなければいけない。

（でも、真っ先に俺を狙ってきたとなると、その残党に力はないのか？…）

一応FBIにも連絡はしてある。コナンの正体もFBIには言っ

あるため、新一にはみんな協力的だ。特にジョディやキャメルなどは…。

新一が考え込んでいるとナースが病室に入ってきた。

めんどくさいので新一は寝たふりをし、その間にナースは点滴のパツクを変えていった。

そしてそのまま新一は襲ってきた眠気に負けた。

反応

しばらくして、新一は息苦しさを感じて目が覚めた。

時計を見るとまだ夜の10時過ぎだった。

なんとなく呼吸がしにくい気がして、新一は起き上がろうとした。

しかしその時、

「!!!!!!!!!!!!」 っっっっ

全身に刺すような激しい痛みを感じてベットに倒れこんだ。

「っっ っっっっっっ」

耐えることのできない痛みにより新一はベットのうえでのたうちまわっていた。

なんとかナースコールに手を伸ばそうとしたがいつも置いてある所には存在しなかった。

「つつつ

」

声にならない悲鳴を上げながら必死に手で探しても見つからない。
その間にも痛みはどんどん増していく。

「 つつ
」

必死でシーツを握りしめて痛みに耐えていたが、やがて耐えられなくなり、またのたうちまわる。

意識が飛ばないことが不思議なくらい……

（あいつ絶対何かを隠している……………）

小五郎は面会時間をとくに過ぎた病院の中を歩いていた。

今日の新一に少し違和感を感じて戻ってきたのだ。

（何年見てきたと思ってるんだ。警部たちはごまかせても俺の目はごまかせねえ）

小五郎は新一の病室を目指しながらどうやって吐かせるかを考えていた。

やっと病室の前にたどり着くと、中から物音が聞こえた。新一が起きていたと思った小五郎はノックもせずにドアを開けた。

異常

小五郎は目の前の光景に驚愕した。

新一はベットから落ちて床に倒れていて、腕は大量の血液により真っ赤に染まっていた。

しかも、体をくの字に曲げて自分の腕をもう一方の手で握りしめながら、声にならない悲鳴を上げていた。

「新一！……！！！」

小五郎がかけよっても新一は返事をする事もなくただもがき苦しんでいた。握りしめた腕から大量の血液を流しながら

「おい！！どうした！！！」

よく見てみると真っ赤に染まった腕には点滴の針を無理やり引き抜いた跡があり、もう片方の手で握り締めて傷口を自分の爪が食い込むことにより大きくし、大量の血液が溢れださせていた。

なんとか、その手を離させようとしたが、痛みに耐えていて加減がきいていない状態では簡単には離れない。

人を呼ばうとナースコールを探したがどこにも見当たらない。

「くそっ!!!」

小五郎は一旦新一のもとを離れて、病室の入り口から外を見渡した。

ちょうど廊下を歩いていた1人の男性に向かって怒鳴った。

「おい!!! 医者を呼んできてくれ!!!」

男性はいきなり怒鳴られたため、一瞬ひるんだが小五郎の手が血で真っ赤に染まっていたのを確認すると走ってナースステーションに向かった。いった。

小五郎は病室の中に戻ると、新一の状態をもう一度確認した。

腕からの出血、荒く速い息、意識はあるようだがこっちの呼び掛けには応えがない。どこか痛むのか時々苦痛の声も聞きとれ、大量の

汗もかいている。

自分のネクタイをとり、新一の肩のところにきつく巻くと、床に落ちていた点滴の針に目がいった。

「おいっ！！大丈夫かっ！？」

そこへ先ほど医者呼びにいった男性が病室に戻ってきた。

「医者か？」

小五郎が問いかけると男性は首を横に振った。

「1時間くらい前に大規模な爆発事故があつたらしくて先生たちみんな手が離せないんだ。下の階はもってんてこまいだ。当直の医者や看護師だけじゃ全然たりないらしい。」

小五郎は舌打ちした。

爆発事故となるとけが人がどんどん運ばれてくるだろう。下手するとこのまま後回しになる。しばらくの間考えこんで小五郎は病室を出た。

そして携帯である番号を呼びだした。

実験

4時間後、病室にはある人物が現れた。

「新出先生!!」

小五郎はその人物を確認すると、名前を呼んだ。

電話で呼んだのは娘の学校の元・保険医であり、事件でもいろいろ関わりをもった新出だった。

黒の組織が壊滅したことをジョディから聞いた新出は米花町に帰ってきていた。

新出は新一の状態を確認すると眉をひそめた。

「これはいい　　っ」

新一の状態は4時間前とあまり変わっておらず、ただ荒い呼吸に力がなくなってきた。

最初より痛みが波が出てきたのか、新出が到着するまでに小五郎と何回か言葉を交わすことができたが、すぐに痛みが増して、会話も長くは続かない。逆に波が出てきたことによって苦しみ方が一層ひどくなったように思う。

新出は床に落ちていた点滴の針を確認すると、つるされていたパツクを確認した。

「これ」

「なんなんだ？それ」

小五郎もなんとなく不審に思っていた点滴を指さしながら聞いた。パツクには手書きで英語の文字が書かれていた。

「これにはこう書かれています。」 全身に激しい痛みを伴う。耐えられるかはその人の気力次第。解毒方法は体内に入ってから3時間以内に解毒剤をうつこと。12時間で効果は切れる。命にかかわるものではない」と

「3時間つてもう過ぎてるぞっ！それに解毒剤って - - -」

小五郎が周りを見回すと椅子の上に袋に入った注射器が置いてあった。

「まさか、これが？」

「ええ、おそらく……。でも、ここに書いてあることが本当か確証はありません。すでもう時間は過ぎていきますし……」

2人が考えこんでいると、小五郎の腕を新一がつかんだ。

「……………そこに……………書いてあること……………は、おそらく本当……………です……………」

とぎれとぎれに声を発しながらも、新一はしっかりと口調で言った。

「……………だから……………薬が切れるまで……………待ちます……………」

新一は薄く目を開けながらしっかりと2人を見た。2人は新一が言いきるのを待って口を開く。

「どうして嘘じゃないって言いきれんだ？」

小五郎が疑問をぶつけると荒い息を繰り返しながら、新一は言った。

「あいつらは……実験が………したいだけだから………」

「実験？」

「俺が……俺の体が………どこまで耐えられるのか………
………っ」

言い終わらないうちに、また波が襲ってきたのか新一はうずくまるように痛みに耐えていた。

2人はそんな新一をただ見てることしかできなかった。

結果

それから約8時間後、やっと薬の効果がきれた。

その瞬間、新一が今まで無意識に小五郎の腕を強く握りしめていた手から力がぬけた。

「おい。新一！」

小五郎が呼びかけても反応は返ってこない。新一は意識を失っていた。

「無理ありません。12時間痛みに耐え続けたんですから…。」

新出は新一の脈と呼吸を確認した。

そして、小五郎とともに新一の体をベットに戻すと、腕の治療に入った。

傷口は大きく、整っていなかった。

点滴の針を無理やり引き抜いた上に、自分で傷口を広げたんだから無理もないが…

結局、爆発事故のせいで医者も看護師も来ることはなかった。

12時間、小五郎と新出が新一の処置をしていた。

いつのまにかもう朝になり、外は明るくなっていた。

「ホントに12時間だったな

」

「ええ

」

「ちょっと、電話してきます。ここをまかせても大丈夫ですか？」

小五郎がうなずくと新出は病室を出てった。

2人つきりになると小五郎はベットの上で眠っている新一に声をかけた。

「おい。起きてるんだろっ?。」

小五郎がそう言つとベッドの上の新一はゆっくり目を開けた。

「……………気づいてたんですか。…」

「俺は眠りの小五郎だからな」

小五郎の言葉に苦笑すると、新一は起き上がろうとして途中でやめた。

「……………まだ寝てる。その体じゃもたない。」

小五郎はそう言つて部屋を出て行こうとした。

「……………聞かないんですか?。」

小五郎は足を止めてそのまま応えた。

「…明日聞く。お前に死なれたら、蘭が悲しむからな。」

小五郎が病室を出ていくと、新一は大きく息を吐いた。

(……………疲れた。)

そして、そのまま眠りについた。

決断

翌朝、佐藤と高木が病室にやってきた。だいぶ具合も良くなって、普通に起き上がれるようになっていた。

「それじゃ、その点滴を変えた看護師が犯人だって言うの？」

「はい、おそらく…。」

佐藤が手帳に書き込むと高木のほうに振り返った。

「先ほど確認したところ、看護師、医者などの病院関係者には全員アリバイがありました。」

高木がそう言うのと新一はいぶかしげな顔をした。

「全員にアリバイが？」

医者や看護師は普通どうやっても1人の時間が必ずある。新一の点

滴を変えた時間は新一自身はつきりとは覚えてないため、範囲は広く、ずっと誰かと一緒にいたなんてありえない。

「お前は知らないだろうが、昨夜、大きな爆発事件があつて医者や看護師はみんな駆り出されていたそうだ。全員にアリバイがあつても不思議じゃない。」

ベットの横の椅子に腰かけていた小五郎がそう言つと、新一も納得したが、新たな疑問が出てきた。

「……爆発事故？」

「この病院の近くの工場で機械が爆発してその日が隣のアパートにも燃え移つたみたいなんだ。そのせいで死傷者が多数出ている。目暮警部も今そつちのほうにいつてるよ。」

高木は手帳を閉じながらそう言つた。

目暮の直属の部下である2人が新一の元へ来たのは、警部の配慮だろうか。

普通ならもつと重要性の高い爆発事故のほうに人員を詰めるはずだ。

こんな、対処のしようもない、しかも正直よく分からない事件に捜査一課の人間が出向くはずがない。

そんな新一の考えを読みとったのか、佐藤は苦笑しながら新一の顔をみた。

「おとといの警視庁内であたが毒を盛られた件もあなたとのかかわりが深い捜査一課で調べたほうがいいだろうっていう上の判断よ。それにあなたを守れなかった私たちの責任でもあるし。爆発事故のほうへは三課の中森警部たちも加わってるから大丈夫よ。」

「…どうして三課が？」

キッドがらみの事件でもないのに中森警部たちが協力するのも少し不思議である。他に適任の課があるだろうに。

「それは、私たちにも分からないけど、目暮警部と中森警部は昔からの知り合いでそのせいって聞いたけど…」

ますますよくわからない佐藤刑事の言葉に新一は首を傾げるしかなかった。

高木刑事も困ったような顔で笑っていた。

「……で、結局犯人は誰なんだ？」

話がどんどん逸れていく3人の会話に見かねた小五郎は口をはさんだ。

結局昨日、新一が寝てからずっと隣で付き添っていた小五郎は疲れた顔をしていた。

（……やっぱりごまかせないよな……）

新一はそんな様子の小五郎に苦笑しながら、どうするかを考えた。

（組織のことを日本の警察に話すのはFBIに止められてるし……。ジョーディ先生に電話しようにもおっちゃんがずっとここにいたからできなかったし、策を練るにも昨日はいつのまにか意識がなかったし。）

新一が考え込んでいると、高木が話を振ってきた。

「……それで、工藤君話してくれるかい？君が知っていること」

「どうして、犯人が嘘をついてないって分かったのか。それとこの犯人についてなにか知ってるんじゃないの？」

佐藤もそれに続き、問いかけてくる。

小五郎は黙ったままだ。

新一の中では選択肢は3つあった。

一つは、警察に全部を話して協力してもらうか。

二つ目は、適当な嘘をでっちあげてこの場をやり過ごすか。

そして、もう一つは……………

佐藤の携帯の着信音が鳴り響いた時、

新一は決断した。

壊れていく日常

「新一君、今日も事件？」

その頃、蘭たちは新一がいない中で学校生活を過ごしていた。

「……そうみたい。今朝、お父さんが今日は新一も一緒に事件だから学校には行かないだろうって。」

蘭は浮かない顔をしながら答えた。

「どうしておじさまから聞くのよ？本人に電話してないの？」

園子はお弁当を食べながら、眉をひそめた。

「電話しても、電源切ってるみたいで……。そうしたら、お父さんが事件だって言うから。」

「あんたたち、付き合い始めたっていうのに案外さっぱりしてるのね。今の新一君だったらもう少しねちねちしてそうなのに」

「ねちねちって…」

戻ってきてからの新一は前とはあきらかに変わっていた。

前みたいに憎まれ口は叩くけど、大事なところではちゃんとってくれる。事件で一緒にいれないことも多いけど、毎回連絡はくれる。前よりも優しく、なんか大人っぽくて、すごく大切にしてくれる。

でも、一緒にいなかった時間何をしていたのかはまだ話してはくれない。

蘭が一度だけ聞いたことがあるけど、なんだかんだでごまかされた。

少し変わった雰囲気の話も、たまに学校にいても蘭の前から姿を隠すようにどこかへ行く話も。そして、時折見せる顔色の悪さも。

ホントは聞きたいけど、たぶんごまかされるだろう。

新一の口から言ってくれるのを待つしか聞く方法はない。

無理に聞き出そうとすると、ホントのことを言ってくれるか分からなくなるから。

（新一……。新一の苦しみを私には分けてくれないの？

一人で抱えきれなくなっしてからじゃ遅いんだよ？）

蘭は窓から空を見上げた。

今にも、雨が降り出しそうな空だった。

決別

佐藤が電話に出ると、相手は目暮警部のようだった。

「……………えっ？あ、はい……………」

話は一旦途切れて、残りの3人の間は沈黙だった。

電話を終えると、佐藤はため息をついた。

「……………まいったわね。」

「どうかしたんですか？」

高木は佐藤の落胆の色が見える顔を心配そうに見た。

新一や小五郎も佐藤の次の言葉を待った。

「また、別の事件よ。遺体が見つかったらしくて、他の人が手がい

っぱいだから、私たちに行けって。」

佐藤は携帯電話をしまつと、新一に向き直った。

「また後で来るから、悪いけど話はその時でお願いしてもいいかしら？—応ボディーガードはつけておくから。」

「ボディーガード？」

新一が首をかしげると佐藤は小五郎のほうをみて笑顔を見せた。

「ということで、よろしくね！眠りの小五郎さん。」

「おれ！？」

小五郎がポカーンとしていると、佐藤は苦笑しながら言った。

「だって、目暮警部がそう言っんですもの。『工藤君の護衛はあの疫病神にまかせておけって』」

「疫病神って」

小五郎がうなだれると佐藤は高木をつれて病室を出た。

そのとき、高木刑事が申し訳なさそうに2人に会釈したのに新一も困った顔をした。

「……………警部、疫病神って……………」

うなだれている小五郎をいいことに新一は気付かれないように枕の下に隠しておいたものをとりだして、小五郎に向けた。

パシュっっ

そのまま小五郎が顔を上げることはなかった。

協力者

小五郎を眠らせて、病院から抜け出した新一は近くの公園に止まっていた黄色いビートルズに乗りこんだ。

「助かったぜ、灰原。」

隣に座っている人物に声をかけると、その人物は不機嫌そうな声を出した。

「もう少し、言うことがあるんじゃないの？」

灰原は顔を新一のほうにむけると、あるものを出し、新一に渡した。

「これで警部のふりして、2人を病院から遠ざけるなんていきなり言われても、そんな簡単にできるわけないじゃない。」

蝶ネクタイ型変声機を受け取ると、新一はそれを上着のポケットにしまった。

さっきの電話は灰原が目暮の声で電話したものだ。もちろん、遺体が発見されたのも嘘。今頃、2人は困惑してるだろう。

「…あの2人を困らせるのは正直心が痛むわ。」

哀はそう言うとうつぶした。組織が壊滅してから哀は宮野志保には戻らず、今までと同じように小学生として暮らしている。宮野志保に戻るより、灰原哀として今の仲間と一緒にいるほうを選んだ。

組織の影がなくなっただけで、哀は少しずつ変わっていった。前よりも積極的に外に出るようになり、明るくなっていった。

そんな哀に、この事実を伝えるのは残酷だと思ったが、黙っているわけにもいかない。

「灰原、組織の残党が現れた。」

「…………えっ？」

「まさか、まだ残っていたなんて…」

ここ数日のことを話し終えると哀は悲痛な顔をした。

やっと終わったと思ってたのに。まだいたなんて…

「それで、蘭君たちは大丈夫なのかね？」

運転席にいた阿笠博士も話に入ってきた。

「ああ、今のところはな。狙いは俺だけみたいだし。」

新一は顎に手を当てて考えた。

（組織を潰した復讐なら、おれを殺せば済むはず。なのに、どうして確実に死なない薬を俺に盛ったりしたんだ？俺を苦しめるため？だったら、蘭やおっちゃんたちを狙うはず。狙えるチャンスはたくさんあったんだ。なのに、なんで……）

考え込んでいると車は博士の家についていた。

「新一、まずは一旦休んだほうがいい。その体で少し疲れたじゃろう」

阿笠にそう言われ、新一自身今まで自覚してなかった体のだるさを実感した。

自覚し始めると、体はどんどん重くなっていく。

「…じゃあ、一休みしてからこれからのことは相談しましょう。私はその間にジヨディ先生たちに連絡しておくから。」

哀はそう言って、車を降りた。

新一もそれにくくと自分の家に帰って行った。

警察内

「……………それで、指示された現場に行っても、何もなかったと。」

「……………はい。」

警視庁に戻った高木と佐藤は、病院からの出来事を白鳥に話していた。

目暮は爆発事件の捜査からまだ帰ってきていない。

「それで、病院に戻ったら、工藤君はいなかった。……………か。」

「……………はい。」

高木がその言葉にますます沈んでいく。

佐藤は隣で複雑な表情をして考え込んでいた。

「工藤君……いったい何をかくしているのかしら？……私たち警察に言えないことを……」

「毛利さんを眠らせてまで、行くな……いったい今どこにいるんでしょう？」

「毛利さんは？」

白鳥が聞くと、ちょうど通りかかった由美が答えた。

「工藤君を探してみるって。心あたりでもあるのかしら？」

「どうして、君が？」

「病院の前で眠りの小五郎さんに会ったから、声かけたのよ。すごく慌てたから。」

4人が話しこんでいると、白鳥の携帯が鳴った。

「……………はい。分かりました。」

残りの3人が言葉を待っていると、白鳥はうんざりしたように言った。

「上からの呼びだしだよ。状況を報告しろって。もうこれで今日4回目だ。」

「どういことですか！？それは

」

白鳥が信じられないという顔をしていると、その部屋の奥に座っていた人物は言った。

「何度も言わせないでくれ。重要参考人が逃げたんだ。すぐに探し出せ。」

「しかし、彼は被害者です！！そんなやり方はっ

」

「彼は、今回の警視庁内の事件の重要参考人だろう。それは、間違っていないはずだが？」

その人物が、何を言っているのだという風に、笑いながら答えた。

白鳥は、自分を落ち着かせようと大きく深呼吸をした。

「確かにそれは間違っています。ですが、容疑者でもない彼をそんなことまでして見つけ出そうなんておかしいです。」

「何でもいいから、早く見つけ出せ。こっちからも人員を出すから。」

その人物はうんざりしたように白鳥を追い払った。

部屋を追い出された白鳥は、唇をかみしめた。

「いったい何が起きているんだ？………」

『重要参考人、工藤新一をなんとしても見つけ出せ。』

指名手配

「工藤君を指名手配！！！！？？？？」

戻ってきた白鳥から話を聞いた佐藤・高木・由美は驚愕した。

事件の被害者を指名手配なんて聞いたことがない。ましてや、今まで散々協力してもらった彼を…。

「いったいどうしてそんなことに……？」

もう訳が分からないといった3人に白鳥が複雑な表情で答えた。

「…………警視の上層部に圧力をかけている人間がいるのかもしれない。」

「ええっ！！？？」

高木が驚きの声を上げると、佐藤が難しい表情で言葉を発した。

「……確かにそう考えると納得がいくわね。」

「でも、どうして工藤君を？」

「……………おそらく、2か月前に起こった、組織が壊滅した事件がらみだろう。」

「……………目暮警部!!」「……………」

振り返るとそこには、目暮と山辺と千葉がいた。爆発事件の捜査か

ら帰ってきたのだ。

山辺の手には分厚い資料の入った封筒が握られていた。

「君たちに話したいことがある。みんな来てくれ。」

逃走

「工藤君、入るわよ？」

ドアの向こうから哀の声を聞き、新一はベットから起き上がった。

ドアから鍋を持った哀が入ってきた。

「……………悪いな」

新一が哀が鍋からよそったおかゆを受け取ると、それを口に運んだ。

その様子を哀はじいっと見ていた。

「……………なんだよ」

新一がジト目で哀を見ると、哀はクスッと笑った。

「別に。」

哀はニコニコしながら部屋の窓のほうに向かった。

そんな様子を見て、新一はほっと笑った。

（よかった。……元気そうじゃねえか）

新一が、再びおかゆを口に運び始めると、哀がなにかを見つけたように言った。

「あら……？警察……」

新一がそれに気づき、窓のほうに歩みよると、哀の上から外を見た。

（高木刑事たちじゃない……？……担当をはずされたのか？……）

2人のスーツの強面の男が、この家のチャイムを鳴らした。

「…出なくていいの？」

哀が不思議そうに上を見上げると、新一は下にいる刑事をじっと観察した。

チャームを何回も押して、出ないと確認した2人の刑事は、スーツの中ポケットからあるものを取り出した。

「灰原。隠れるぞ！」

「えっ？」

ガチャンっ

家のドアが開く音がして、哀は目を見開いた。

「どっしてっ」

新一は下を気にしながらも、隠れられそうなところを探していた。

「サイレンサー付きの拳銃で打ったんだよ。あれは、警察じゃない！！」

新一が小声でそう言うと、部屋の外をうかがいながら少し開けた。

ガタンっ

（えっっ）

いきなりドアノブを持っていた手の感覚がなくなったかと思うと、新一は部屋の外に引きずり出されていた。そのまま体を壁に勢いよく叩きつけられ、息が止まったかと思った。

（まだ下にいたはずなのにっ……………）

新一がそう思っているところにはいた黒い人影はなにやら、スプレー缶のようなものをこっちへ向けてきていた。

ドンっ！！

それを確認するか、しないかのところでその人物の体が斜めに傾いた。

何が起こったか分からないでいると、いきなり手を引っ張られ、それにつられるように走り出した。

1階まで走り、そのまま外に出る。

先ほどの2人の人物が乗ってきた車の横を過ぎ、2人はとにかくできるだけ遠くへ走った。

「助かったぜ、灰原」

どこかの路地裏で、新一は息を切らせながら助けてくれた人物に礼を言った。

新一まではいかないまでも少し苦しそうな哀は携帯を捜査しながらその声に答えた。

「あいつらはいったい

」

「組織の残党か、おそらく警察関係者の類だろう。」

「どうして、警察が……」

新一がその場にしゃがみ込むと、哀は通りのほうをのぞいた。追っては来ていないようだ。

「……警察の上層部に組織の残党がいたんだ。それで、警察を好きないように動かしてるんだろう。」

新一が哀の携帯をのぞくと、そこには地図のようなものが出ていて、一点に赤いしるしが付いていた。それは、規則正しく点滅していた。

「俺らを見失ったみたいだな。」

「……警察を敵に回すとなると、最悪の事態よ。」

「ああ。でも、こうなったら仕方ないだろう？なんとかして、残党を見つけ出すんだ。蘭たちに手を出される前に。」

こうして、始まってしまった組織との最後の戦い。

平和な日常が、今、完全に崩壊した。

序章（前書き）

一応、ここから2章突入です。

序章

「どうしたの？ 蘭」

「うん。なんかパトカーの数多くない？」

蘭と園子は学校からの帰宅途中、最近できたケーキ屋でお茶をしようとして町を歩いていた。

「確かにそうね。なんか事件でもあったのかしら？」

園子がそう言うと蘭が浮かない顔をした。

「…新一の事件かな？……」

それを見た園子は、ため息をついた。

「ら　ん！あの推理野郎なら大丈夫よ！！あんまり悩みすぎると今に禿げるわよ……！」

そう言いながら、蘭の頭をツンツンとつつくと、蘭はふきだした。

「禿げないわよ！！いくらなんでも」

蘭が少し明るくなったのを見た園子は走り出した。

「じゃあ、早くケーキ食べに行こうよ！狙ってるのなくなっちゃう
！！！」

「ちょっと園子、待ってよ ！！！」

「……2か月前の事件って、あの、たくさんの著名人が逮捕されたって……」

会議室には目暮、白鳥、佐藤、高木、千葉、由美、山辺そして小田切が集まっていた。

高木が恐る恐る聞くと、目暮は山辺が持っていた分厚い封筒の中身を取り出して、机の上においた。

その資料には、ずらりと人の名前が書いてあった。しかも、どれも見覚えのあるものばかり……

「……これって、全部逮捕された人物の名前じゃ

」

資料を手にとってみた佐藤は、目を通して驚いた。ざっと100人以上はいた逮捕者の名前が全部書いてあった。年齢や職業、経歴までも……

「この資料は、例の2か月前の爆発事件によって組織の存在が明らかにする前に出る前に私に送られてきたものだ。」

小田切がそう言うと、目暮と山辺以外の全員が驚き、次の言葉を待った。

「『警察の上層部の中で唯一信用できるあなたにこれを送ります。すぐに役立つときがくるでしょう。どうか国民を守ってください。』」

S・K 「この手紙と一緒に入っていたそうだ」

目暮がB4サイズの1枚の紙を見てそう言つと、高木はとっさにいった。

「S・Kつて、まさか」

この場でS・Kなんて1人しか思い浮かばない。ましてや、今この場に集まっているのは彼に関係してのものなのだ。

「…これが送られてきたとき、私は彼のことはよく知らなかった。だから、S・Kという人物を思いつかなかった。今回、警視庁内で的事件を目暮から聞いてやっと気付いたんだ。そして、山辺の話も……」

「山辺刑事の話つて？」

一同が山辺のほうを見ると、山辺は口を開いた。

「2か月前の爆発事件のとき、ちょうど現場に居合わせたんです。」

爆発事件

「……ちょうど仕事が休みだった私は、家の近くを散歩していたんです。そこで小さい頃よく遊んだ廃ビルに差し掛かって、懐かしくなつて入ったんです。そしたら……」

山辺が話し始めると一同はそれに聞き入った。謎の組織が発覚したあの日の出来事を……

「……おい。どういっつもりだ、ベルモット。」

どうせなら屋上で星でも見ようと思っていた山辺は、4階まで来たところで声が聞こえることに気付いた。

気付かれないようにそつと覗くとそこには金髪の女と銀髪で長髪の大男が話していた。大男と一緒にサングラスの男がいて、ベルモットと呼ばれた女に向かって拳銃を向けていた。

山辺が息をのむと、女は笑いながら答えた。

「どういづつもあり何も、私は最初からあなたに賛同はしてないの。」

ベルモットは、拳銃を向けられていても動じることなく、男2人と対峙していた。対して男2人の内、長髪の男のほうは無表情だった。

「…そのガキのほうにつくってことか。」

そう言うとき長髪の男はベルモットの足元を見た。

山辺もその時、ベルモットの足元に自分より少し若いぐらいの青年が倒れているのに気付いた。顔は見えないが、どこか苦しいのか肩を大きく上下させて息をしていた。

「私はただsilverbulletとangelを守りたいだけよ。」

そう言いながら女も拳銃を男たちに向けた。

「こんな組織この2人にあつてから、いいものに思えなくなつたわ。」

会話の中からベルモットの足元に倒れている青年がsilver bulletと呼ばれている人物だとかろうじて理解した。もつと他に疑問に思うことはあるのに、目の前の光景に頭がうまく働かない。刑事になつてから、こんな過激な現場にあつたことはない。自分が冷静になれてないことすら、気付かなかつた。

「裏切り者は、その死に底ないと一緒に死んでもらおう。」

長髪の男が拳銃を倒れている青年のほうにむけたのを確認した女は、いきなり声量を上げて言った。

「よかつたわ。彼だけは助けられそうね。」

その言葉の意味をなぜ自分が理解できたのか分からなかつた。別に彼女が自分のほうを見て、言葉を発したわけではない。でも、なぜかその言葉は自分に向かつて言っているように思えて。

そして、女が男たちの後の配電盤を打ったとき、気付いたら飛び出していた。

配電盤の中から大量の煙があふれ出て、あたりは何も見えなくなつた。その中で、感覚を頼りに倒れている青年のもとに駆け寄つた。やつとの思いで辿り着くと、その青年を抱えて階段に向かった。後ろで男たちが何か言っているのが聞こえたが、それに構っている余裕がなかった。

なんとか2階まで来たところで一回止まった。青年の状態を確認すると肩にかすり傷程度はあるが、特にこれといった大きなケガはなさそうだ。ただどこか具合が悪いのか顔色が悪く、苦しそうな息遣いをしている。

(…………あれ?…………工藤新一?…………)

その時顔を見て初めて、その人物を確認した。テレビなどで見たことがあるが、あったことは一度もない。テレビで見たときよりも、ずいぶんやつれているようにも見えるが……。

ド　　ン!!!!!!!!!!

(!?)

その時、今までいた上の階で大きな爆発音がした。と、同時に建物が揺れ、今にも倒壊するんじゃないかというように、あちこちから物が落ちてきたり、窓ガラスが割れたりした。

とつさのことに硬直していると、上の階の床が抜けたのか、頭上から大きな塊が落ちてきた。

体が反応できず、目をつむると、一瞬体が宙に浮いたかと思ったら、地面にたたきつけられた。

「
痛っ」

体を起こすと、自分の肩に手が乗っているのに気がつく。

新一が自分を助けてくれたのだと気づくまでに数秒ほど時間がかかった。

「大丈夫ですか？」

新一が声をかけると、やっと我に返り、あたりを見回した。先ほど

自分がいた場所に大きながれきが落ちている。あのままあそこにい
たら、無事ではいられなかっただろう。

「ありがとう。君こそ大丈夫なのかい？」

新一は携帯を取り出し、何かを確認すると山辺に向かって言った。

「ここから逃げてください。一刻も早く。」

「えっ、でも君は…」

山辺がそう言うのと、新一は携帯を打ちながら言った。

「あなたを巻き込むわけには、いかないんです。」

そう言われると同時になぜか意識が遠のいた。

過去

「……………それで、気が付いたら公園のベンチで寝ていたんです。」

山辺の話を一同は黙って聞いていた。

皆、その爆発事件の現場をみていたため、規模の大きさは分かっている。

しかも、それに関連して謎の組織が発覚し、どんどん逮捕者が出て、警視庁、各地の警察はてんてこ舞いだった。例のマージャン牌の事件のときに集まった各地の警察関係者全員が連絡を取り合って、2ヶ月たった今でもすべてを収集できなかったわけではない。

「夢だったのかと思って、そのあと現場に行ったら、廃ビルが燃えていて入れない状態でした。消防車がもう到着していて、時間を見たら彼に会ってから5時間以上たっていました。」

火事が完全に消されたのは、確か爆発から7時間後くらいだったはずだ。

消された後の現場には、身元不明の遺体が3つあった。遺留品もなく、いまだに特定できていない。

「どうしてそれを警察に言わなかったの？」

佐藤は頭に思い浮かんだ疑問を口にした。

いまだに身元不明の遺体であるが、その話からベルモットという人物のことは調べられるかもしれない。でも、今までその話を聞いたことはなかった。

「……………このメモがポケットに入っていたんです。」

そう言いながら小さな紙切れを佐藤に渡した。そこには端正な文字でこう書かれていた。

『あそこで見たことは誰にも言わないでください。僕のこと。この事件にかかわらないでください。』

急いでいたのか、文章は簡単で素っ気なかった。でも、そこに書いてあることははっきりしていた。

「これ、工藤君が？」

「そうとしか考えられん。最近の彼は、異常なほどに自分の名前を表に出したがらなかったからな。今回のような大きな事件の調査をしていたとなれば納得がいく。」

目暮がそう言つと他の刑事も頷いた。

警部の言っことは合っていた。

新一は、自分の名前が表に出ないように警部たちにも言っていたし、山辺のポケットにメモを入れたのも新一だ。

でも、ひとつだけ間違っていることがある。

『調査』をしていたから、姿を隠していたわけではない。

確かに調査はしていたが、目暮たちが思っているように自分の意思で始めたわけではなく、依頼をされたわけでもない。

この誤解が新一をますます追いつめることになるとも知らず、それぞれの思惑のまま、事件は進んでいく……………。

小五郎の思い

「退場記録がない？」

「はい。この方が園内から出たという記録はありません。」

「じゃあ、いつたいどこに？」

小五郎が考え込むと、チケット売りのスタッフは困った顔をした。

「ここは、トロピカルランド。蘭と新一がここに遊びにきた日から新一は姿を現さなくなった。絶対にあの日に何かがあった。そう考えた小五郎は、その日の新一の足取りを追っていた。」

しかし、ここで途切れてしまった。

蘭から聞いた通りの道筋をたどって行って、やっとここからだと思
っていたのに……。

足取りはすぐにわからなくなってしまった。

「あの……」

スタッフが声をかけると小五郎は我に返った。軽くお礼を言つとそ
の場を去った。

（ふう……）

気分転換をするため煙草をふかすと、小五郎は考えを巡らせた。

（いったいどういふつもりなんだ……？……）

新一の考えが読めない。ヤツが何かの事件に巻き込まれて姿を隠し
ていたのは知っていた。帰ってきてから、雰囲気が少し変わったこ
とも。それが、何かしら今回の事件と関わっていることは気付いた
が、姿を消した意味が分からない。警察から逃げればどうなるかは
ヤツなら分かるはずなのに……。

「……くそっ！」

煙草を地面に捨て踏みつぶすと、改めてトロピカルランドを振り返った。

（そういえば、コナンが家に来たのもあの日だったよな？…）

一瞬、そんな考えが廻ったが頭を振って、そのことを追い払った。

あいつは関係ない。

2か月前に両親のもとへ戻って行った1人の少年のことを思い出しながら、そういえばあいつはどうしているだろうと思った。

いつもちよろちよろしてうっとおしいと思ったが、いつの間にか自分の子供のように思っていた。

手放すのが正直つらかった。

そんな思いは表に出さず、手放してから何か心にぽっかり大きな穴が出来たように感じた。

蘭と2人で囲む食卓は、なんだか味気がない。それを隠すように2人とも今日あったこと、依頼のことなどたわいもない話を一生懸命した。静かになってしまうと寂しさがこみ上げてきてしまうから。

新一が帰ってきたことは蘭だけではなく、実は、小五郎にとっても支えになっていた。

事件現場や警視庁で会ったびに憎まれ口を叩いていたが、新一がいることでコナンがいらないことへの空虚感がなくなっていた。もしかしたら、2人がどこことなく似ているからかもしれないが…。

（余分なことを考えたか……）

今はヤツを探すしかない。直接、話を聞けば真実が分かるだろう。あいつのことは、昔からよく知っている。嘘をついているかなんてすぐに分かる。

「とっ捕まえて、全部白状させてやる」

小五郎はそう決意して、もう一度トロピカルランドへ足を踏み入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3894v/>

いつか絶対...

2011年11月11日23時59分発行